様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：２６４０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2020
課題番号：１８Ｋ０１１９５

研究課題名（和文）パラオ諸島の戦跡観光におけるサブジェクトとエイジェントの民族誌的研究

研究課題名（英文）An ethnographic study of subject and agent in the battlefield tourism in Palau

研究代表者
飯高　伸五（IITAKA, Shingo）

高知県立大学・文化学部・准教授

研究者番号：１０６１２５６７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,900,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、太平洋戦争の戦跡を訪問する営為（戦跡観光）において、戦跡観光の現場に身を置く多様な行為者が、国家の枠組みで太平洋戦争の記憶を想起するサブジェクトとして、あるいは国家の枠組みに回収しきれない創造性を持ったエイジェントとして、構築されていく過程を民族誌的な観点から検討した。事例として、パラオ諸島ペリリュー島における戦闘終結75周年、米軍によるグアム「解放」75周年を巡る動向に注目し、日米の訪問者など戦跡観光に関わる人々、戦跡やモニュメントなどのモノ、人々やモノを受け入れてきた地域社会の3者間のもつれあいのなかで、戦争の記憶を想起する主体が構築されていく過程を明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義
人、モノ、地域社会のもつれあいのなかで、戦跡観光における記憶の主体が形成されていく過程を検討した本研究は、ホストとゲストの相互作用に注目する観光研究、戦争の記憶のせめぎあいに注目する戦争社会学、太平洋戦争の地域社会への影響を検討してきたオセアニア研究に対する学術的貢献を果たすことができる。また、アジア・太平洋地域の人々が国家的枠組みを超えて戦争の記憶を分有し、相互理解を深めるための基礎資料の提供など、広く社会的還元を果たすことができる。

研究成果の概要（英文）：This study investigates the way in which various actors visiting old battlefields of the Pacific War as tour destinations interact each other, and at times turn into subordinate subjects remembering the war from their own countries' perspectives or other times creative agents critiquing their nation's war memories. Investigating into the events related to the 75th anniversary of the Peleliu Battle in the Palau Islands and the 75th anniversary of the United States' Liberation of Guam, the study reveals the entanglement of tourism actors, historical materials such as war remnants and monuments, and local societies embracing both foreign visitors and war monuments, and thus examines the construction of agents that remember the Pacific War from transnational perspectives.

研究分野：文化人類学

キーワード：文化人類学　歴史認識　戦跡　観光　パラオ　グアム　ペリリュー

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

近年の観光人類学は、多様な行為者が参入する観光現象を把握するために、媒介者としての現地人観光ガイドの存在、ホスト社会内部の多様性やゲストの志向性の多様化などに注目してきた[橋本和也(編)『観光経験の人類学』2011 年]。また、文化人類学一般では、行為者と周囲の複合的環境との交渉や行為者間の相互行為が注目され、感情や身体のレベルに降りたって主体形成を検討するアプローチが提唱された[田中雅一(編)『ミクロ人類学の射程』2006 年]。こうした研究動向を踏まえて、本研究では、国家や個人および集団の間で様々な記憶のコンフリクトが発現する戦跡観光――戦争当事国の人々が慰霊や体験学習を目的に、近代戦争の戦跡を訪問する営為――の現場に、相互行為や主体形成の視点を応用することを出発点とした。

戦跡観光は、退役軍人による慰霊のための訪問からリゾート観光者による偶発的な訪問まで広範にわたり、ホスト／ゲストの二分法では捉えきれない多様な行為者が関与している[Miles, *Battlefield Tourism: Meanings and Interpretations,* 2012]。また、戦争社会学の研究が明らかにしてきたように[福間良明・野上元・蘭信三・石原俊(編)『戦争社会学の構想』2013 年]、戦跡観光は、国家主導で構築される戦争の記憶やナショナル・ヒストリーとの関係から検討されてきた。研究代表者はこれまで、太平洋戦争がミクロネシアの現地社会に与えたインパクト、ミクロネシアの人々から見た太平洋戦争の記憶などを検討してきたが、太平洋戦争の記憶が、日本とアメリカおよび現地社会の多様な行為者の「もつれあい(entanglement)」のなかにあると考えるに至り、戦跡観光の現場における相互行為や主体形成に注目するに至った。

２．研究の目的

本研究では、戦跡観光に関わる行為者の意図や目的によって戦跡観光の形態を区別するのではなく、戦跡観光に関わる多様な行為者を、国家の枠組みで太平洋戦争の記憶を想起するサブジェクト(subject: 従属主体)、あるいは国家の枠組みに回収しきれない創造力を持ったエイジェント(agent: 行為媒体者)として定位し、かれらが行為主体として形成されていく過程に着目した。とりわけ、行為者と周囲の人やモノとの交渉に注目することで、戦跡観光に関わる行為者の行為遂行性(performativity)を解明することを目的とした。より具体的には、パラオ諸島ペリリュー島および米領グアムを事例として、観光客や観光ガイドを含む日米および現地社会の様々な行為者とかれらをとりまく社会環境――行為者をとりまく人とモノの複合――との間の交渉に注目し、戦跡観光に関わる行為者がいかにアイデンティティや歴史認識を構築し、主体形成を遂げていくのかを解明することを目的とした。

現地調査では、現在進行形で観察可能な戦後の節目のイベントに注目した。すなわち、戦前日本統治領で太平洋戦争の戦場となったミクロネシア地域（旧南洋群島)のうち、パラオ諸島のペリリュー島における戦闘終結 75 周年（2019 年)、および米西戦争後にアメリカ領となり、太平洋戦争に際して日本が一時占領していたグアム島における米軍による「解放」75 周年（2019 年）に関連した一連の行事を取り上げた。

３．研究の方法

現地での隣地調査と文献調査によってデータ収集を行った。戦跡観光に関わる多様な行為者が相互行為を行い、主体形成を遂げていく場として、まず一般的な観光客が参加する戦跡ツアーに参加し、参与観察をおこなった。また、2019 年に実施されたペリリュー戦終結 75 周年記念行事および米軍によるグアム「解放」75 周年に関連する行事に注目し、現地で文献資料の収集、現場での参与観察、および関係者への聞き取り調査を行った。

ペリリュー島の調査では、まず一般の観光客を対象とした戦跡観光に参加し、参与観察を行うとともに、現地人のツアーガイドに対する聞き取り調査を行った。研究代表者は、これまでの調査研究において、日本資本の観光会社によるツアーには参加経験があるため、本研究ではアメリカ資本の観光会社および現地人経営の観光会社のツアーに参加し、観光会社によって観光コンテンツがどのように異なるのかに関するデータ収集を行い、それが戦跡観光の現場における主体形成に与える影響を分析した。また米軍上陸 75 周年記念日にあたる 2019 年 9 月 15 日前後の動向について、ペリリュー島およびパラオ共和国コロールにて情報収集を行った。

グアム島では、米軍による「解放」75 周年に関連した動向調査を中心におこなった。グアムの War in The Pacific National Historical Park が組織した関連イベントにおける「解放」の歴史観の強調、2018 年に常設展を公開したグアム博物館におけるチャモロ文化の表象と太平洋戦争関連の展示、太平洋戦争の遺跡・遺物に関心を示さないといわれる日本人観光客の観光行動などに関するデータ収集を行った。なかでも、戦後の日本社会で一時期注目されたが、現在は忘却されつつある太平洋戦争の記憶として、残留日本兵・横井庄一をめぐる現地社会と日本人観光客の認識のギャップに関するデータ収集を行った。

４．研究成果

(1)ペリリュー戦終結 75 周年およびグアム島解放 75 周年

2019 年は米軍のペリリュー上陸から 75 年にあたる節目の年であった。これまで 9 月 15 日の上陸記念日にあわせて記念式典が実施されるのが慣例であったが、2019 年の公式行事は、9 月末から 10 月初旬にかけて約 1 週間にわたって実施された、パラオ共和国独立 25 周年記念の行事に組み込まれた。そこには、パラオ共和国要人が列席し、パラオの歴史の重要な局面として、日米によるペリリュー戦の記憶が喚起された。記念式典がパラオ共和国の独立記念日にあわせて行われたことは、単なる便宜上の理由にとどまらず、太平洋戦争の記憶が戦争当事国である日米に加えて、パラオの人々にとっても重要な意味を持つようになっていることを示唆している。この点に関連して、パラオ・コミュニティ・カレッジ等で資料収集を行い、50 周年等のこれまでの節目の年においても、ペリリュー戦争博物館建立など、戦争当事国とは異なる観点から太平洋戦争の記憶のローカル化の試みがなされていたころが明らかになった。戦跡観光の主体として、日本およびアメリカの観光客を主に想定していたが、パラオの人々が日常的に戦跡に身を置く機会（ツアーガイドによる戦跡訪問、個人による偶発的な遺物発見・収集、歴史保存局等公的機関による戦争遺跡・遺物の調査、平和学習のための戦跡訪問など）を想定しておく必要があることを確認した。こうして、ペリリュー滞在中には現地人ガイドに対して、戦後のペリリューにおける戦争遺物収集の経緯、50 周年記念行事と戦争博物館の構想、日米の訪問者との交流形態などに関する聞き取り調査を行った。

同時に、戦争当事国である日米にとってのペリリュー戦の意義も継続して強調されていることが確認された。例えば、75 周年を機会にアメリカ海兵隊がペリリュー島南部に新たな記念碑を建立し、公式行事の一環として除幕式が行われた。アメリカ軍にとって、多大な犠牲を払って勝利したペリリュー戦の意義は現代でも継続的に想起されており、定期的に Civic Action Team による慰霊碑訪問と整備が行われてきた。75 周年の公式行事に加えて、上陸記念日である 9 月 15 日にも既存の米軍慰霊碑にて献花と国旗掲揚が行われるなど、継続した現地訪問を通じて犠牲の精神が再確認され、軍事的な主体形成期に寄与している。日本側でも、75 周年の公式行事には在パラオ日本大使館の要人も参列した。また、終戦 70 周年に天皇・皇后両陛下がペリリューを訪問したこともあり、日本でもペリリュー戦終結 75 周年の動向は一定の注目を集めた。その他、9 月 15 日にあわせて元日本軍の遺族がペリリュー島の公共墓地に個別の墓石を建立する事例もみられた。モニュメントや墓石を建立するという営為自体は、戦跡観光の現場において国家の観点から戦争の記憶を想起する従属主体の形成を促しているようにもみえる。しかし米軍慰霊碑への献花とともに日本の慰霊碑にも献花がなされていたり、個別の墓石を建立した元日本軍遺族が国家主導の歴史観とは一線を画し、むしろペリリュー島で交流を深めたパラオ人やアメリカ人訪問者と行動を共にしたりするなど、戦跡観光の現場での出会いから、ナショナルな戦争の記憶に還元できない行為主体の形成がなされていることがわかった。

(2)ペリリュー島における戦跡観光

2019 年 9 月に実施したペリリュー島での現地調査では、現地人経営の観光会社が主催する戦跡観光に参加し、戦後生まれでアメリカ滞在経験も長い現地人ガイドが、日米とは異なる現地社会の視点をどのように提示するのか、現地人ガイドとゲストとの交渉のあり方にはどのような特徴があるのかなどに注目し、データ収集をおこなった。研究代表者によるこれまでの研究では、日本資本の観光会社による戦跡観光は、日本人観光客を主な顧客としており、戦記物や日本の元軍人・軍属の生存者から収集した情報をもとにして日本軍の視点からみた軍事的展開を追うようにツアーが構成されていること、ツアーの随所で戦死者に対する「祈り」が捧げられる一方で、観光客を飽きさせない娯楽的要素も多分に取り込まれていることなどが明らかになっている。本研究による現地調査では、現地人が運営する観光会社および現地人ガイドに関する情報収集を行い、既存のデータと比較しながら戦跡観光の現場における主体形成の過程を検討した。

ツアーでは現地人の観点として、戦争に先立つ日本統治の記憶、ペリリュー島からの退島とバベルダオブ島での戦時下の避難生活、完全に焼け野原と化した島への 1946 年の帰還、それでも戦後の国家形成期にペリリュー島から多数の要人を輩出していることなどが説明されるという特徴があった。これらは、戦跡観光に先立ってペリリューの居住区の入り口で、ガイドが年長者から伝え聞いた内容をもとに臨場感をもって説明された。これは日本資本の観光会社のツアーでは欠落している要素である。同時に、軍事史的な観点は、現地人ガイドによるツアー全体にわたって温存されており、アメリカ軍関連の遺物・遺跡の訪問に時間が割かれた。日本資本の観光会社によるツアーでは、1985 年に日本政府が建立した西太平洋戦没者の碑を必ず訪問することになっているが、現地人経営の観光会社のツアーでは時間の関係などで訪問しないこともあり、重要な記憶の場にはなっていないことがわかった。共通の歴史教育を受けてきた現地人ガイドとアメリカ人のツアー参加者の間には、米軍による「解放」の歴史観が共有されており、オレンジ・ビーチやブラッディノーズ・リッジなど米軍が多大な犠牲をはらった場がツアーのクライマックスとなっていた。また「解放」の歴史観は、ツアー参加者による「祈り」やミニ星条旗掲揚などの儀礼的要素を通じて確認されていた。ここでは、戦勝国アメリカの観点から太平洋戦争の記憶を想起する従属主体の形成がなされているようにみえるが、同時に現地人ガイドが喚起するペリリューの人々にとっての破壊や喪失の記憶が、戦勝国の観点から見た「解放」の歴史観を

相対化する契機ともなっていた。これは、日本人ガイドが日本人観光客を案内する日本資本の観光会社のツアーではみられない現象であり、太平洋戦争の記憶の越境を通じた、ナショナルな主体の揺らぎともいえる現象であった。

(3)残留日本兵・横井庄一

War in The Pacific National Historical Park はグアム「解放」75 周年に際して、米軍の上陸地であるアサン・ビーチなどを拠点に、市民参加型のイベントを組織したり、SNS を通じて「解放」に関連する出来事を発信したりするなど、一般向けの情報発信を充実させた。また、解放 75 周年記念委員会は、解放記念日のイベントにあわせて *Guam Liberation 75 Years: A Legacy of Peace and Friendship* をリリースするなど、すでに定着した「解放」の歴史観を再確認する機会を設けた。2018 年に新しくオープンしたグアム博物館の常設展示でも、米軍による「解放」の歴史観が再確認されている。同時に、グアム博物館には残留日本兵・横井庄一の展示も設けられ、日本では忘却されつつある戦争の記憶が再度喚起された。一方で、同島南部のタロフォフォ滝リゾート公園では、レジャー施設とあわせて、同氏が潜伏していたヨコイ・ケーブが再現されていたが、近年では廃れて訪問客も少なくなっている。

タモンのビーチに林立するリゾートで過ごす日本人観光客の観光行動において、タロフォフォのヨコイ・ケーブも、ハガニアのグアム博物館も主たる目的地とはなっていない。ペリリュー島の戦跡観光が多数の日本人観光客を獲得しているのに対して、グアムにおける太平洋戦争の戦跡は日本人観光客の関心を引くことは希である。2019 年の時点では、タモンとハガニアとを結ぶ路線バスが整備されたことで、ハガニアのチャモロ・ビレッジの夜市が日本人観光客で賑わいを見せるようになっていた。しかし、それ以外の公共交通手段が未整備なこともあり、グアムにおける太平洋戦争の戦跡、戦後の一時期日本人を熱狂させた横井庄一の痕跡は、日本人観光客にとって忘却の彼方にある。逆説的にも、アメリカ中心の「解放」の歴史観に組み込まれたり、グアムの現地社会にとっての戦争の記憶のなかにローカル化されたりしながら、横井庄一の記憶は喚起され続けている。ここでも、国家中心の観点では捉えきれない戦争の記憶の在り方を再確認した。

以上の研究成果をもとに、2020 年度にはオンラインでの国際学会 Royal Anthropological Institute 2020 および国際シンポジウム Contesting Memorial Spaces in the Asia-Pacific (Kyushu University Border Studies)に参加し、研究発表を行った。今後は、人、モノ、地域社会のもつれあいのなかで、戦跡観光における記憶の主体形成の過程をさらに分析すると同時に、理論的な枠組みを整理し、学術論文としてとりまとめていく。本研究の成果は、観光研究やオセアニア研究一般に対する貢献が期待できるとともに、戦跡観光の現場における多様な行為者の相互作用や主体形成をトランスナショナルな観点から分析することで、観光客の目的に応じた分類論に終始しがちだったダークツーリズム研究、ナショナルな枠組みから行われがちだった戦争の記憶研究に新たな視点を提供することも期待できる。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計2件（うち査読付論文　0件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　1件）

１．著者名 飯高伸五	４．巻 173
２．論文標題 パラオにおける伝統の再編と日本統治の記憶	５．発行年 2020年
３．雑誌名 季刊民族学	６．最初と最後の頁 48-56
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 飯高伸五	４．巻 88(3)
２．論文標題 1974年と2004年、パラオの伝統政治と近代政治－山本真鳥の研究を手がかりに	５．発行年 2021年
３．雑誌名 経済志林	６．最初と最後の頁 263-285
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計4件（うち招待講演　0件／うち国際学会　2件）

１．発表者名 Iitaka, Shingo
２．発表標題 Converted Memoryscape in a Former Mining Village in Palau, Micronesia : On the Way Local People Appropriate the Development Discourse by the Empire of Japan
３．学会等名 Royal Anthropological Institute 2020. Anthropology and Geography: Dialogues Past, Present and Future. Panel B06: Multi-disciplinary studies of 'islandscape' as a meshwork（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 Iitaka, Shingo
２．発表標題 Shifting Memoryscape of the Pacific War : On Two Japanese Veterans’ Projects in Palau, Micronesia
３．学会等名 Contesting Memorial Spaces in the Asia-Pacific (International Conference hosted by Kyushu University Border Studies)（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 飯高伸五
２．発表標題 慰霊と観光の狭間で－ペリリュー島における戦争の記憶をめぐるエイジェンシー
３．学会等名 国立民族学博物館共同研究「オセアニア・東南アジア島嶼部における他者接触の歴史記憶と感情に関する人類学的研究」
４．発表年 2019年

１．発表者名 飯高伸五
２．発表標題 玉砕の島・ペリリュー島の戦跡観光における「祈り」
３．学会等名 第34回日本オセアニア学会研究大会
４．発表年 2019年

〔図書〕　計2件

１．著者名 石森大知、丹羽典生（編）、飯高伸五ほか（著）	４．発行年 2019年
２．出版社 明石書店	５．総ページ数 368
３．書名 太平洋諸島の歴史を知るための60章	

１．著者名 山口徹（編）、飯高伸五ほか（著）	４．発行年 2019年
２．出版社 風響社	５．総ページ数 364
３．書名 アイランドスケープ・ヒストリーズ－島景観が架橋する歴史生態学と歴史人類学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関